

# 草<sup>くさ</sup>ぶえ ふいて ico

## ■ 楽曲データ

歌詞：中川正文 作詞

楽曲：松園洋二 作曲

発表：本願寺仏教音楽・儀礼研究所 2011年

初演：「御正忌報恩講奉讃演奏会」 2011年1月15日 聞法会館

初出：『聖歌・讃歌集』第3巻 本願寺出版社 2013年

管理番号：M2660

## ■ 創作の経緯

2010（平成22）年に本願寺仏教音楽・儀礼研究所（現・浄土真宗本願寺派総合研究所仏教音楽・儀礼研究室）の委嘱により創作され、翌年に発表された。

## ■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第3巻収録

底資料：自筆譜

比較資料：－

校訂の詳細：特記事項なし

## ■ 解説

### ◆ 作詞者・作曲者について

作詞は、僧侶で児童文学者の中川正文さん（1921～2011）。絶筆となった親鸞聖人のお話をはじめ、『本願寺新報』に掲載された数々の仏教童話をご記憶の方も多いでしょう。作詞を担当した仏教讃歌には、《しってるね》（曲・矢田部宏）や《ごおん》（曲・丸山玲子）などがあります。

作曲は、松園洋二さん。京都を拠点として活躍する作曲家で、現在は平安女学院大学子ども学部で教鞭を執っています。仏教讃歌では、《み仏はほほえみて》などの合唱編曲も手掛けています。

### ◆ 内容について

児童文学の分野で名を遺した作詞者らしく、歌詞は子どもの視点から綴られています。きっと、そよ風の吹く、爽やかな秋晴れの日なのでしょう。草笛を吹いたり、お花を摘んだりしながら、家族に手を引かれてお寺への道をたどるといふ、どこか懐かしいお参りの光景に、ご自分の幼い頃を重ねる方もいらっしゃるかもしれません。

報恩講のとき、仏教婦人会の皆さんは、おみがきやお斎の準備などで忙しく過ぎられることでしょう。この営みが、人と人をつなぎ、お寺や親鸞聖人への親しみを深めてきました。《草ぶえ ふいて いこう》で描かれる世界も、同じ礎のうえにあります。この思いを、おみのりとともに、いつまでも大切に受け継いでいきたいものです。

#### ◆練習のヒント

動きのあるメロディーが魅力的です。4拍子の曲ですが、2拍ひとまとまりに感じると、歌いやすいと思います。

①曲の前半は、とてもリズムカルです。最初のフレーズは、「草ぶえ」「ふいて」という言葉の直前、強拍におかれた休符の感じ方がポイントです。歌い出すための準備が遅いと、タイミングもずれやすくなります。前奏をよく聴いて、テンポにのりましょう。

②8小節目の終わりからの4小節は、一転してメロディーに長い音が増え、流れるような雰囲気になります。9小節目に出てくる「ソ井」が鍵なので、音程に気を付けてください。

③9・10小節の大きく音が跳ぶところは、高い方の音に照準をあわせてダイナミックに歌いましょう。また、「報恩講」という大切な言葉を歌うときは、「お」の母音が「あ」に近づいてしまわないように。

④締めくくりの部分（13小節目以降）は、冒頭の雰囲気が戻ってきます。ここも休符をよく感じて、タイミングよく発語しましょう。3番は歌詞にあわせて、メロディーが変更されているので、注意しましょう。

⑤最後の長い音（27～29小節）の背後では、ピアノが軽やかに曲を締めくくります。その動きとひとつになるように、ピッチを保って、伸びのある声を出しましょう。

解説執筆：山口篤子（浄土真宗本願寺派総合研究所研究員）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 92（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第220号収録）を加筆・修正のうえ、転載。

Copyright: Jodo Shinshu Hongwanji-ha Research Institute. All Rights Reserved.